

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 10号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成
二十四年
十月
第十号

< 2012年10月 >

古賀 順子

「浮世絵展示会〜日本より感謝を込めて」

パリ 7 区フォントノワ広場に面するユネスコ本部で「浮世絵展示会〜日本より感謝を込めて」が開催されました。主催はユネスコと公益社団法人日本ユネスコ協会連盟で、10月8日から12日までの五日間です。昨年3月11日東日本大震災後、世界中から多くの支援が寄せられました。世界中の人が自分の不幸として受け止め、温かい援助を送ってくださったお礼の意を表する展示会です。

1947年7月19日、仙台で日本初のユネスコ協会が誕生します。ユネスコへの参加を呼びかける民間運動でした。第二次世界大戦後、世界平和を願う人々の熱い思いは日本中に広がり、1951年日本のユネスコ加盟が承認されます。第二次世界大戦終結から1952年サンフランシスコ講和条約締結まで、日本は連合国軍占領下にありました。その日本で、国連加盟（1956年12月）に先だってユネスコに加盟したことは大きな意味を持っています。日本とユネスコの関係は深く、パリ本部でこの展示会を実施することは、日本人を支えてきた精神や価値観、文化、日本の在り方をあらためて考え直す機会だと思えます。

今回、千代田ユネスコ協会顧問である望月義成氏の浮世絵個人コレクションから貴重な8点が貸し出されました。そのオリジナル浮世絵と並んで、ボストン美術館所蔵スポルディング・コレクションの美しい原画を300倍にまで拡大したデジタル画像3点(2x3m)と10点(1x2m)が展示されています。細部を拡大した浮世絵からは、これまで気がつかなかった江戸の生活が見えてきます。歌川広重「東海道五十

三次、日本橋朝乃景」橋のたもとの魚売り「棒振り」のかごの中には、まな板と鯛が見えます。

「今日、浮世絵は美術品です。しかし、200年前の江戸の人々にとって、浮世絵は日常品でした。美術ではなく、江戸の日常を描いた大衆文化として見直して欲しい」。パリ日本文化会館での講演会「200年前へタイムスリット〜浮世絵をデジタル画像でのぞく」講師牧野健太郎氏の言葉です。四季折々の行事、茶屋風景、芝居小屋から出てくる観客目当ての立食い寿司屋など、当時の生活が生き生きと描かれています。歌舞伎役者や美人画がファッションをリードし、旅の案内、お店や商品広告として多量に刷られ、日本中に流通していた浮世絵。江戸の人たちは、今の私たちより生活を楽しんでいたのではないかとさえ思えてきます。200年後、日本人で良かったと褒めてもらえる文化を私たちは残せるのかなと思えます。

展示会場のユネスコ本部には、京都の庭師佐野藤右衛門が設計した日本庭園があります。アメリカ人の母に生まれ、日本とアメリカに引き裂かれた思いで創作活動を続けた芸術家野口勇が、日本から石を運び入れて造った「平和の噴水」に水が流れ、すぐ側の壁面には「長崎の天使の顔」が掛けられています。1945年8月9日長崎原爆投下で全壊してしまった浦上天主堂の正面を飾っていた天使像です。長崎市からユネスコ30周年を記念して寄贈されました。原爆で片目を失ったこの天使のまなざしに心打たれない日本人はいないと思えます。「負の遺産」としてユネスコが世界遺産に登録した広島原爆ドーム、そしてパリのユネスコ本部で静かに私たちを見守っている長崎の天使。後世に残す遺産であれば、「負」ではなく、浮世絵のように後世の人が誇りに思ってくれる文化でありたいと願います。

ベ ス ト ピ ア
Bestopia

「パリ通信 10号」

ベストピアは小原靖夫の
個人誌です。

平成二十四年十月
第十号

パリ・ユネスコ本部
「長崎の天使」像



(撮影：古賀 順子)